

アルトゥーロ・ベラーノが編んだラテンアメリカ若手詩人アンソロジーの出版を持ちかけられ、しぶしぶ引き受ける。だがそれが運のつきで、ベラーノがメキシコを離れたあと、アルコール漬けになってしまう。

シモーヌ・ダリュール：

フランス人留学生。人類学を学ぶためメキシコを訪れていたときに知り合ったベラーノと、一時期恋人関係になる。マルキ・ド・サドを愛読するマゾヒストでもある。のちにアルゼンチン人写真家ハコボ・ウレンダの妻となったことが判明する。

ホセ・(ヒメコンドル)・コリーナ：

「エル・ナシオナル」紙の編集委員。ヨーロッパに発つ前のベラーノとリマを知る人物。

ペロニカ・ボルコフ：

トロツキーの曾孫娘。同じ出発前のベラーノとリマに出会う。

アルフォンソ・ベレス=カマルガ：

画家。ベラーノとリマからドラッグを買っていた人物。

フリオ・セサル・アラモ：

詩人。UNAMで詩作のゼミを持つ。田園詩人派で、はらわたリアリストたちと対抗関係にある。

ウーゴ・モンテロー：

国立芸術協会 (INBA) に勤務。1982年、ニカラグアのマンガアで開かれた詩人会議にメキシコ代表団を率いて参加したとき、帰国していたウリセス・リマを連れていくが、思わぬ事態に発展する。

*ヨーロッパその他で出会った人々 (1970年代～90年代)

イポリト・ガルセス：

ペルー人の詩人。他のペルー人たちとともにバリの屋根裏部屋で暮らしていたが、あまりの問題児ぶりに仲間の怒りを買ひ、追放される。その後一人暮らしをしていたところへ、パリを訪れたウリセス・リマが寄寓する。

ロベルト・ロサス：

ペルー人の詩人。ラテンアメリカの仲間たちとバリの屋根裏部屋でコミュニティ的な共同生活を送る。パリにやってきたウリセス・リマと親しくなる。

ソフィア・ペレグリーニ：

アルゼンチン人。ロベルト・ロサスやアルゼンチン人のパートナーとともにパリで共同生活を送る。

ミシェル・ピュルトー：

フランスの前衛詩人。パリでウリセス・リマの訪問を受ける。

メアリー・ワトソン：

イギリス人。オックスフォード大学の学生で、友人ヒューヤドイッ人の夫婦とともに、ワーゲンバスに乗ってフランスやスペインをヒッピーのように旅する。バルセロナ近郊のキャンプ場で夜警をしていたアルトゥーロ・ベラーノと出会い、恋に落ちる。

アラン・ルベール：

フランス人。南仏の港町で、洞窟のなかで暮らし、臨時の漁師をしている。ベラーノとリマが再会した現場に居合わせ、リマに漁師の仕事を斡旋する。

ノルマン・ボルツマン：

ユダヤ系メキシコ人。テルアビブの大学で哲学を学びながら、恋人のクラウディア (ユダヤ系アルゼンチン人) と友人のダニエル (ユダヤ系メキシコ人) と同居している。クラウディアに誘われてイスラエルまでやってきたウリセス・リマを家に泊めるが、それ以来、三人の生活は次第に狂い始める。

ダニエル・グロスマン：

ユダヤ系メキシコ人。ノルマン・ボルツマンとクラウディアとともにテルアビブの大学で学び、その後メキシコに帰国。エディット・オステルとも親しい。ノルマンの運転する車で交通事故に遭うが、一命をとりとめる。

ハイミト・キュンスト：

ドイツ人。おそろしく知的障害者。ネオナチの若者で、核兵器工場を見張りにイスラエルを訪れている。ウリセス・リマと同じ監房に入れられて親しくなり、リマの友人だった看守のおかげで解放される。その後、リマを連れてドイツに帰国する。

アンドレス・ラミレス：

チリ人の密航者。1975年、ポルトガル経由でバルセロナにたどり

着き、不法滞在者として隠れて生活する。ある日、ランブラス大通りを歩いていたときに数字が頭の中で踊り出すという奇妙な体験をする。その数字でサッカーくじを試してみたところ大当たり。家族をチリから呼び寄せ、複数のバルの経営者となる。仕事を探していた同郷のベラーノに出会い、皿洗いの仕事を提供する。

アベル・ロメーロ：

チリ人。マゾヒストグループの一員。1983年9月11日、パリのカフェでベラーノと出会う。

エディット・オステル：

ユダヤ系メキシコ人。「エンリケ・マルティン」(『通話』)に登場する「メキシコ人の彼女」。画廊で働いていたとき、初めてアルトゥーロ・ベラーノに出会う。その後ヨーロッパに渡り、イタリア、フランスなどを経て、恋人の画家アブラム・マンズールとともにバルセロナに移り住む。ある日ベラーノと再会するが、恋人との関係や体の問題に悩み、いったんメキシコに帰国。まもなくバルセロナのベラーノのもとに舞い戻り、恋人関係が始まる。拒食症や鬱など、心身ともに問題を抱え、ベラーノと別れたあとはローマに移り住み、その後メキシコ、アメリカで暮らす。

ホセ・レンドイロ：

ガリシア人の弁護士、詩人。スペイン各地を車で旅し、ガリシア地方を訪れたとき、キャンプ場で働いていたアルトゥーロ・ベラーノと知り合う。二年後、バルセロナの弁護士事務所を訪ねてきたベラーノに文芸誌の書評欄を提供するが、ベラーノと愛娘の情事を目撃してしまう。

スサーナ・ブーチ：

カタルーニャ人の看護婦。健康を害して入院していたベラーノと知り合い、恋に落ちる。ベラーノと文芸評論家イニャキ・エチャバルネの決闘を目撃する。

ギリェム・ビーニャ：

マヨルカ島出身の版画家。当時作家となっていたベラーノの友人で、決闘の介添人を頼まれる。

ジャウメ・ブラネウス：

バルセロナの新聞社に勤務。同僚イニャキ・エチャバルネから、決闘の介添人を頼まれる。

イニャキ・エチャバルネ：

バルセロナの新聞社に勤務。実在の文芸評論家イグナシオ・エチエバリア (元「エル・バイス」紙) のパロディ的人物。アルトゥーロ・ベラーノから、刊行前の自分の小説をけなされるのではないかと理不尽な因縁をつけられ、決闘に応じる。のちに、健康を害しながらアフリカに渡ったベラーノに葉を送る仲となる。

アウレリオ・バカ：

マドリードの大御所作家。「文学の冒険」(『通話』)に登場する作家Aと思われる。

ペレ・オールドニェス：

フリオ・マルティネス=モラーレス：

パブロ・デル・バジェ：

マルコ・アントニオ・バラシオス：

エルナンド・ガルシア=レオン：

ペラーヨ・バレンドアイン：

マドリードで開催されたブックフェア会場に集まった作家・評論家。

クララ・カベサ：

オクタビオ・パスの元秘書。メキシコ市のウンディード公園で、パスとウリセス・リマの邂逅を目撃する。

マリア・テレサ・ソルソナ=リボット：

女ボディビルダー。カタルーニャ地方の海沿いの町で、ウエイトレスをしながら日タトレニングに励む。アフリカに渡る直前のアルトゥーロ・ベラーノにアパートの部屋を提供する。

ハコボ・ウレンダ：

アルゼンチン人写真家。おもに紛争地帯でジャーナリスト活動に従事する。マドリードの新聞社から派遣されたアルトゥーロ・ベラーノとアンゴラで出会う。

エルネスト・ゴラルシア=グラハーレス：

メキシコのパチューカ大学ではらわたリアリストたちの研究をする。自称、世界でただ一人の専門家。



《エクス・リブリス》通信 Vol.8

特集 ロベルト・ボラーニョ

FREE!
Apr.2010



《エクス・リブリス》第8回配本

野生の探偵たち

謎の女流詩人を探してメキシコ北部の砂漠に向かった詩人志望の若者たち、その足跡を証言する複数の人物。時代と大陸を越えて二人の詩人=探偵のたどり着く先は？ 作家初の長編にして最高傑作。



Los detectives salvajes (1998)

カバー装画：ジュール・ド・バランクール「衆愚の饗宴」

1972年パリ生まれのジュール・ド・バランクール JULE DE BALINCOURT は、9・11 以降のニューヨークアートシーンを代表する作家の一人。2010年3月20日～7月4日、森美術館ギャラリー1にて「ジュール・ド・バランクール展」を開催。

ロベルト・ボラーニョ

Roberto Bolaño

1953年、チリのサンティアゴに生まれる。1968年、一家でメキシコに移住。その後、エルサルバドル、フランス、スペインなどを放浪して青年時代を過ごす。詩人として出発し、1984年に小説家としてデビュー。1998年、最初の長編小説である『野生の探偵たち』でエラルデ賞を受賞、さらに1999年にはロムロ・ガジェゴス賞を満場一致で受賞。その後も精力的に作品を発表するが、2003年、50歳の若さでこの世を去る。主な作品に、『通話』（白水社）、『2666』などがある。



《エクス・リブリス》次回（第9回）配本は——【6月上旬発売予定】

ヴィルヘルム・ゲナツィーノ 鈴木仁子 訳

『そんな日の雨傘に』Ein Regenschirm für diesen Tag……ドイツ

靴の試し履きの仕事で、街を歩いて観察する中年男の独り言。関係した女性たち、子ども時代の光景……居心地の悪さと恥ずかしく、滑稽で哀切に満ちた人生を描く。

■今後の刊行ラインナップ（書名はすべて仮題です）

ポール・トーディ 小竹由美子 訳

『ウィルバーフォース氏のヴィンテージ・ワイン』……イギリス（8月発売予定）

サーシャ・スタシニチ 浅井晶子 訳

『兵士はどうやってグラモフォンを修理するのか』……ボスニア・ヘルツェゴビナ（10月発売予定）

ペール・ベッテルソン 西田英恵 訳

『馬を盗みに』……ノルウェー（12月発売予定）



今回はお休みの予定でしたが、編集担当の作った登場人物一覧がもったいないので急遽発行しました。右側を切り離して使うのも可。シリーズの最新情報は www.hakusuisha.co.jp/exlibris で。 2010年4月 白水社/チーム《エクス・リブリス》作製

『野生の探偵たち』主要登場人物

アルトゥーロ・ベラーノ：

チリ人。ボラーニョの身分的存在。1968年、15歳のときにサンティアゴからメキシコに移住。高校を中退後、73年、チリに一時帰国し、セノチェットのクーデターに遭遇したとされる。メキシコに戻ってからは前衛詩運動（はらわたリアリズム）に参加、ウリセス・リマとともにその中心的人物となる（のちに離脱）。姉夫婦をポン引きの恋人アルベルトから守るため、リマとガルシア＝マデーロを伴ってメキシコ北部のソノラ砂漠へ向かい、それと平行して謎の詩人セサレア・ティナヘーロの足跡をたどる旅をする（第I部・第三部）。その後ヨーロッパに渡り、フランス、イタリア、スペインなどを放浪する（第II部）。

ウリセス・リマ：

メキシコ人。アルトゥーロ・ベラーノの盟友。はらわたリアリズムの創始者で、雑誌「リー・ハーヴェイ・オズワルド」を創刊するがまもなく廃刊。本名アルフレド・マルチネス。ベラーノとともにドラッグの売買をして収入を得ている。ルベの逃避行にベラーノらと同行。ソノラ砂漠から戻ったあとヨーロッパに渡り、フランス、イスラエル、ニカラガなど世界各地を転々とする。

ファン・ガルシア＝マデーロ：

メキシコ国立自治大学（UNAM）法学部一年生（日記が書かれた1975年の時点）。アルトゥーロ・ベラーノとウリセス・リマに誘われてはらわたリアリストの一員となり、大学をドロップアウト。第I部と第III部の日記の書き手。

セサレア・ティナヘーロ：

1920年代に実在したとされる前衛詩人。絶叫主義（エストリデンティスモ）にも参加したとされる、最初のはらわたリアリスト。詩人として活動するかわら、メキシコ革命で活躍した將軍ディエゴ・カルバハルの事務所働き、演説原稿の作成などの政治活動を手伝っていたが、ある日突然仕事を辞め、ソノラ砂漠に向かい、消息を絶つたという。謎に包まれた彼女の半生は、代書人アマデオ・サルバティエラの中から少しずつ明らかにされる。

J.M. アルチンボルディ：

ボラーニョの遺作『2666』に登場する謎の小説家。本書では「フランス最高の作家」として何處か言及される。イタリア系を苗字を持つが実際はドイツ人。『2666』では、本書におけるセサレア・ティナヘーロのように謎めいた存在で、登場人物たちはアルチンボルディとその作品をめぐって探偵さながらの冒険を繰り広げる。

*メキシコ時代の仲間たち

マリア・フォント：

詩人。戦闘的フェミニストで、はらわたリアリストたちから一目置かれる存在だが、はらわたリアリズムそのものは嫌悪している。詩やダンス、絵画を嗜み、ソル・フアナを愛する。

アンヘリカ・フォント：

マリアの妹。優れた若手詩人に送られるラウラ・ダミアン賞を受賞している。マリアとともにはらわたリアリストたちのミュージックだが、彼らとは距離を置いている。

ホアキン（キン）・フォント：

カタルニャ系メキシコ人。マリアとアンヘリカの父親。建築家で、はらわたリアリストたちの雑誌「リー・ハーヴェイ・オズワルド」のデザインも手がける。精神を病んでおり、自分の愛車のフォード・インパルに乗ってベラーノとリマがメキシコ北部へ向かったのち、まもなくして発狂、精神病院を転々とする。

ルベ：

姉婦。ポン引きの恋人アルベルトから逃れるため、ホアキン・フォントとはらわたリアリストたちの助けを借りて、ベラーノとリマ、ガルシア＝マデーロとともに北部のソノラ砂漠に向かう。

パンチョ・ロドリゲス：

はらわたリアリストの一人。弟モテスマも詩人。アンヘリカ・フォントに恋している。

フェリペ・ミュラー：

チリ人。同郷のベラーノと特に親しく、バルセロナ移住後も家族ぐるみで交流を続ける。生活に困窮していたベラーノの母親を伴って、二人でファン・マルセの家を訪れる。第II部の重要な語り手の一人。

ハシント・レケーナ：

はらわたリアリストの一人。恋人ソチトルとの間にフランツという息子がいる。

ソチトル・ガルシア：

はらわたリアリストの一人。ハシントの恋人。のちに別れ、女手ひとつで子供を育てていく。

エルネスト・サン・エビファニオ：

はらわたリアリストの一人。バイセクシャル。アンヘリカ・フォントとは親友。

ピエル・ディビーナ：

はらわたリアリストの一人。バイセクシャルで、エルネスト・サン・エビファニオやマリア・フォント、ルイス・セバスティアン・ロサドらの元恋人。

ラファエル・バリ奥斯：

はらわたリアリストの一人。アメリカ人留学生バーバラの恋人となり、その後ヒモになる。

バーバラ・バターソン：

アメリカ人留学生。ファン・ルルフォを研究するためにメキシコにやってきたはずが、ラファエル・バリオスと出会い、はらわたリアリストたちとの付き合いが始まる。のちにアメリカに帰国。

ペルラ・アビレス：

アルトゥーロ・ベラーノの高校時代の同級生。

ラウラ・ハウレギ：

元はらわたリアリストで、アルトゥーロ・ベラーノの元恋人。

カタリーナ・オハラ：

アメリカ人の画家。はらわたリアリストたちと親しい間柄にある。

*メキシコ時代に知り合った人物（1970年代）

アマデオ・サルバティエラ：

セサレア・ティナヘーロをよく知る人物。元詩人で、マヌエル・マブレス＝アルセラとともに絶叫主義（エストリデンティスモ）に参加。その後、詩作を断念し、セント・ドミンゴ広場で代書屋を営む。第II部の語り手では最多登場人物。

ファビオ・エルネスト・ロヒアコモ：

アルゼンチン人の詩人、小説家。キューバなどラテンアメリカ各地を経てメキシコにやってきたころ、ベラーノとリマから雑誌の相談の依頼を受ける。

ルイス・セバスティアン・ロサド：

オクタビオ・パス派の詩人。はらわたリアリストたちを恐れているが、思いがけずそのメンバーであるピエル・ディビーナと恋に落ちる。

アルベルト・モーレ：

姉のフリア・モーレとともに、ルイス・セバスティアンの友人。

カルロス・モンシハイ：

作家・文芸評論家。はらわたリアリストたちから手ひどい目に遭う。

マヌエル・マブレス＝アルセラ：

1920年代メキシコで開始された前衛詩運動、絶叫主義（エストリデンティスモ）の中心人物。詩集『内なる足場』などで知られ、本書では、メキシコを訪れたときに知り合ったジョン・ドス・パスによって作品が英訳されたというエピソードが本人の口から語られている。ベラーノやリマたちからインタビューを受ける。

アウクシリオ・ラクチュール：

ウルグアイ人の詩人。メキシコに亡命していたレオン・フェリペやペドロ・ガルシアスのもとに足繁く通う。1968年に起こったトラテロルコ事件で、大学構内に機動隊が進入したとき、UNAMにひとり電撃したという架空の伝説的人物。アルトゥーロ・ベラーノと知り合ったのは事件のあとで、ラテンアメリカやヨーロッパの詩人たちは若き日のベラーノに伝える。

ホアキン・パスケス＝アマラル：

エズラ・パウンドの紹介者。アメリカの大学で教鞭をとる。スペイン語版『キヤント＝ズ』の刊行記念のためにメキシコ市を訪れたとき、はらわたリアリストたちの歓迎を受ける。

リサンドロ・モラーレス：

編集者。出版社を経営している。エクアドル人小説家バルガス・バルドに乘せられて文芸誌を創刊。同じバルガス・バルドから、